



第67回全県高校総体ラグビー 優勝 於 あきぎんスタジアム

50人の部員

△コロナを生活に根付かせる▽
 先般、今、日本で最も忙しいと思われる田村憲久厚生労働大臣と会う機会があった。本会の顧問をお願いしている富樫博之衆議院議員のお陰で話をすることができた。
 中心の用件がほぼ終わったところで、新型コロナウイルス感染症の今後の見通しはどうかと話題に移った。田村大臣は専門家の話を例に、今も浮き沈みはあると思うが、永い付き合いになると思うと話されておりました。

オリンピック、パラリンピックが終わわり、いくつか印象深い言葉が残っている。
 その第一は、NHKでよく流れた「私達は超えられる」のテロップだ。選手達は目標を定め、その努力の結果がオリンピック、パラリンピックに参加した選手達だ。
 秋工ラグビー部員は全国優勝を目標にしている。日々の練習の中で、全員が常に目標を意識し、成し遂げるための努力をしているだろうか。
 八月にグラウンドを訪れた時、東福岡高校ラグビー部と練習試合を行った際の結果を聞いた。結果は大差で負けようだった。同じ高校生でありながら、どこからその差が生まれるかよく考えてほしい。
 全国には東福岡高校のような強いラグビーチームは多い。小さい頃から良い環境で練習をしてきたから、ラグビーをやる生徒の数が絶対的に多いなどの「差」があることを力説する指導者など多い。そうかも知れない、だがそれを理由にするならば、戦う前から既に負けを認めているのだ。
 どうすれば「超えられるのか」オリンピック、パラリンピックはその答えを教えてくれた。それは指導者と選手自身の厳しい練習の積み重ねの結果であることを見る人々には、その力・技・強い意思・美しさが感動となつて表れたと思う。
 どうかダメな理由は置いて、毎日の練習で常に限界に挑戦し続けるようにしてほしい。指導者は、選手との信頼関係の中で共に歯を喰いしはって自分と戦ってほしい。厳しき故に厳しさを緩やかにするようでは限界を超えられない。

秋工ラガ

発行者
 秋田工業高校ラグビー後援会
 事務局 (018) 862-1256

SUPPORTERS
 OF
 AKIKO
 RUGBY
 CLUB



「私達は超えられる」

秋田工業高等学校ラグビー後援会
 会長 瀬田川 榮一



いずれはマスクをとり、大きな声で酒を酌み交わしながら「昔はコロナで大変だった」などと笑える時がくると思いついて描いていた私だが、大臣の話を伺い、これは間違いで、これからはコロナウイルスとうまく付き合いつながりながら生活していく時代になつていくのだと考えを改めた。
 しかし必要以上に恐れることもないと思う。要はやるべきことをしっかりとやる事を生活の中に根付かせていけば良いのだという思いに至った。
 ほぼ同時に開催された甲子園での全国高校野球の熱戦でもオリンピック、パラリンピックに負けないくらい感動を呼ぶ素晴らしい戦いが繰り広げられた。私がその中で注視したのは、県代表で出場が決まっていたながら、新型コロナウイルス感染症の悔しさに選手・学校はもろろん、郷土の多くの方々が涙をのんだ事と思う。
 一人の不注意がこうした状況を招いたとすれば、取り返しのつかない事である。どうか先に述べたように、新型コロナウイルス感染症とうまく付き合っていく、個々の生活の中できっちり対応できる生活習慣を身に付けてほしい。花園に出場は決めたが、コロナウイルスによつて出場を辞退することがあつてはならない。
 (令和三年八月末日に記載)